

4. 職場における体験活動の充実

県教育委員会では、平成15年頃から、小学校では職場見学、中学校では職場体験、高等学校では就業体験（インターンシップ）を推進しており、現在まで高い実施率を維持している。しかし、受入事業所と体験活動の目的やねらいが共有できていない、生徒の主体性が感じられない、教員の理解不足と担当教員の負担など、学校現場や受入先から様々な声があがっており、体験活動の一層の充実を図る必要がある。

本県においては、若年者の早期離職率や無業者率等が依然として全国平均より高く、職業選択・決定を先送りする傾向や将来設計が希薄なまま、進学、就職する者が多いと思われ、職場における体験活動で「職に就いて働くこと」の現実を実体験させる意義は大きいと考えられる。

また、職場における体験活動は、学校生活で学んできたことと社会とのつながりを体感することができ、学校で培った力を働く場でどのように活用できるのかを確認、発揮することができる重要な機会の一つである。また、体験からその後の進路を考えるきっかけとしても意義がある活動であり、ひいては形成してきた職業観・勤労観や態度を変容、成長させる機会にもなっている。

以上を踏まえ、今後も職場における体験活動をキャリア教育の重要な取組として位置づけ、以下の3つのポイントで改善を進め、効果的な実施を推進していく。

① 発達の段階に応じた目的や目標の明確化

職場における体験活動を進めるうえで、小・中・高の発達の段階を踏まえて、体験活動の目的や目標を明確化する必要がある。文部科学省は、次のように「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達」として示している。

小学生	進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己及び他者への積極的関心の形成、発展 ○ 身の回りの仕事や環境への関心意欲の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 夢や希望、憧れる自己のイメージの獲得 ○ 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成
中学生	現実的探索と暫定的選択の時期
<ul style="list-style-type: none"> ○ 肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ○ 興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 進路計画の立案と暫定的選択 ○ 生き方や進路に関する現実的探索
高校生	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己理解の進化と自己受容 ○ 選択基準としての勤労観・職業観の確率 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 将来設計の立案と社会的移行の準備 ○ 進路の現実的探索と試行的参加

（文部科学省資料を基に作成）

そこで、沖縄県では、インターンシップ等の職場における体験活動の目的や目標を次のように整理した。

	職場見学とは 身近な人の働く姿を見学する	職場体験とは 地域の職場で、職業や仕事を体験する	インターンシップ(職業体験)とは 社会人として、仕事に就く体験をする
目的	<ul style="list-style-type: none"> ○ 仕事の多様さ、人と人のつながり、身近な働く大人への理解を深める ○ 夢や希望を育む 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 勤労観・職業観の育成 ○ 進路意識の伸長 ○ 日常の学習と社会生活との結びつきを体験し考える ○ コミュニケーションと人間関係の大切さの理解 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 勤労観・職業観の確立 ○ 進路選択への主体性・積極性の醸成 ○ 学習意欲の向上 ○ マナー・コミュニケーション能力の育成
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 仕事の仕組みや「働くこと」の大切さを理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の将来を見つめ、働く自分をイメージできるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校の学びと社会のつながりを理解し、社会参画の意識が芽生える

※ 目的は、「実現しようとして目指す事柄。行動やねらい(方向性)」であって、目標は「目的を達成するために目指すべき行動やその道筋を示したもの(状態)」です。各学校では、具体的な目標を設定して、児童生徒を送り出すことが必要である。

各学校においては、児童生徒の実態を十分に把握したうえで、学校教育目標や重点目標と連動した体験活動の目的・目標を設定し、体験活動を通して「身に付けさせたい力」を明確にする。その際、学校目標等と体験活動との関連性と重要性について全職員が共有し、理解することがなにより重要である。

② 事前学習・事後学習の充実

体験活動の効果を高めるには、直前の指導(マナー講座等)や直後の指導(お礼状を書く)のみではなく、体験活動を何のために実施するのかを児童生徒が理解することや受け入れ先の仕事内容に関する調べ学習などの事前学習や、体験活動での気づきやどのような力が身に付いたかを振り返るなどの事後学習の充実を図る必要がある。

職場において見るべきもの、聞くべきことに対して、児童生徒の関心を高め、それらを理解する上で必要な知識を獲得させ、「何のために、何を学びに行くのか」を明確にし、その目標達成に必要な事前の学習を十分に行うことが重要である。また、体験したことや職場の人との会話の内容とそれらから感じたこと、体験を通して実感した自分自身の適性や長所短所、将来に向けての可能性や不安、悩みなど様々な角度からみつめ、体験の意味を丁寧に振り返ることが重要である。

さらに、体験活動を軸に、有機的に他教科や複数学年をつなぐ「事前・事後学習」を実施することで、生徒一人一人のキャリア発達に資する系統的な活動になる。

③ 地域・産業界と協力・協働した実施

キャリア教育を十分に展開するためには、学校が家庭や地域・社会、企業、経済団体等の関係機関との連携が必要不可欠である。そのためには、それぞれの立場・役割を認識し、地域の特性を活かした継続的な体制づくりを推進することが重要である。特に、企業等においては、若手社員等の人材育成や活性化の機会ととらえて、積極的に取り組むことが望まれる。

また、学校は教育委員会と協力して、学校・地域・企業等で構成される協議会を設置するなどして、職場における体験活動や地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進することで、学校を核としたまちづくりにも発展していくことも期待されている。



色のついている部分は、今後、県教育委員会として支援していく。